

「日本とイタリア—芸術と対話」

2010年3月22日

報告者：モニカ・ラッコポラ

「日本とイタリア—芸術と対話」は、日本の著名なイタリア文学者で、1970年代にレーモ・チェゼラーニ教授らのもと本学（ボローニャ大学）で学んだ和田忠彦教授（東京外国語大学副学長）の発案によって2008年11月にボローニャで開催された国際シンポジウムの題目であり、その成果記録集として今回出版された書籍の表題でもある。3月1日、同書刊行記念のプレゼンテーションが芸術学部（略称：DAMS）にて開催された。本学国際交流担当副学長ロベルト・グランディ教授（前副学長）とカルラ・サルヴァテッラ教授（現副学長）、ならびに芸術学部演劇・映画科長マルコ・デマリーニス教授、同研究科長ジャコモ・マンゾリ教授の尽力により実現された。今回書籍刊行物として結実するに至った一連の企画は、和田教授の指揮のもと東京外国語大学において2007年度より実施されている日本の文部科学省による大学院教育改革プログラムによるものである。2008年に開催されたシンポジウムでは、イタリアを含むヨーロッパ文化を専門とする日本側研究者と日本を含むアジア文化を専門とするイタリア側研究者が、映画・文学・演劇・舞踊など多岐にわたる領域について発表を行い、相互に経験を共有することによって多大な刺激を得ることができた。とりわけ特徴的であったのは多数の若手研究者に発表の場が与えられたことである。これは日本学術振興会が支援する若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム(ITP) (2009年度採択) の趣旨に沿うものでもあった。現に、このITPプログラムにより両大学間で締結された博士共同学位・共同指導協定にもとづき、昨秋より東京外国語大学より2名の博士課程学生が本学文哲学部イタリア学科ならびに芸術学部において、それぞれ博士課程に在籍し、学位論文の執筆準備に取りかかっている。今後ボローニャ大学の大学院学生が東京外国語大学において研究活動を行う可能性も多分にありそうだ。また、この年末には、同じ枠組みによるボローニャ大学イタリア学科におけるシンポジウムと70年代のネオアヴァンギャルドについてのシンポジウムがすでになが予告されている。(記事抜粋)